

Co-Mesopotamia 2032

～生産緑地 2022 年問題から考える神奈川県川崎市の都市農地の展望～

都市空間生成研究室

1541002

秋元 友里

都市農地	生産緑地	生産緑地 2022 年問題
農家レストラン	川崎市	地域文脈

1. 計画の目的と背景

都市生活を送る上で、農地の役割や存在意義は非常に大きいものであり、都市農地の保全や活用に関する研究はすでに多く行われてきた。しかし、そもそも都市農地とは何かという本質的な議論にまでは至っていない。現在我々が目にしている都市農地の形態は、都市の中の農地が市街化にさらされて都市農地となり、生産緑地法で保全されたものである。つまり、農地の周辺が都市化する一方で、農地自体は全く都市化にアップデートされていないのである。実際、都市農地の周辺は、住宅、公園、学校、駅などの都市施設によって構成されている。そこで、農地が都市の中で異質さを保って取り残されるのではなく、都市の一部として存在し、周辺を巻き込み、いかにポジティブな影響を与えることができるかが重要になる。その為、都市農地として生成された過程に着目し、都市がより良くなることをビジョンとして提案を行う。

2. 都市農地の定義

2-1. 都市農地の定義と課題

平成 27 年 4 月に施行された都市農業振興基本法（平成 27 年法律第 14 号）では、都市農業の定義を、第 2 条に「市街化区域内農地とその周辺で営まれる農業」と規定している。

東日本大震災は、多様な機能をもつ都市農地を再評価するきっかけとなった。震災時発生時、被災地の都市部において、農地が避難場所として活用されたのである。このことから、防災の観点で都市農地を保全すべきであるという動向が広がり、さらに人口減少や高齢化が進む中、これまで宅地化予定地として見られてきた都市農地に対する開発圧力が低下してきた状況も相俟って、都市農地保全の意向は高まってきているのである。

ところが現在、都市農地保全の施策の一つである生産緑地法の期限が間もなく迫ってきている状況に立たされているのである。

2.2 生産緑地 2022 年問題の概要

都市農業における農産物供給力は、食料自給率確保の一

翼を担っているが、都市農地の特色のまとまった農地がないことなどから、国の主要な農業振興施策の対象とはされてこなかった。その上、高度経済成長期に行政は一部の市街化区域内の農地に宅地並み税金を課すことで、都市近郊部の農地をなくそうとしていたのである。しかしバブル景気が崩壊し、状況は一転する。これを受けて 1992 年に「生産緑地法」によって、30 年にわたって一定条件を満たすものは税制の優遇を受ける政策を定めることで地価の下落に終止符を打ったのである。ところが 2022 年、生産緑地法で定められた 30 年の営農義務はこの年で解かれる。都市農地の税制の優遇はなくなり、税金が支払えなくなった地主は土地を売却する。すると 2022 年以降宅地として市場に供給され、宅地の供給量が多くなることで地価が下がると予測される。さらに都市周辺の緑も減り、様々な都市問題を誘発する恐れがある。これが生産緑地 22 年問題である。

この状況を回避すべく、都市農地保全を目的とした新たなまちづくりの活用法を、本稿で提案して行く。提案するにあたり、前提条件として「都市らしさ」を基準に考えてゆく。なぜなら現在我々が都市農地と呼んでいるものは本来農村に存在していた農村農地であり、本質は何も変わっていないため、都市農地の活用法を考えるのであれば「都市化した農地」つまりその都市周辺空間にこだわった都市らしさのある提案が必要になるからである。

3. 川崎市高津区の農地現状と課題の整理

3-1. 川崎の農業

川崎市は、首都圏のほぼ中心部に位置し、北は東京、南は横浜に挟まれた細長い地形を持つ。かつて多摩川の豊かな自然によって発展し、東海道の宿場町としてにぎわい、江戸時代には大規模な稲作地帯の形成がされてきた都市である。一方で、京浜工業地帯の中核として発展し、高度経済成長期には東京のベットタウンとして宅地開発が行われ、市街化区域の全域において都市化が進んだエリアでもあるため、川崎市に古くから存在する農地、いわゆる都市農地は都市化の波に晒され、農家数は減少

傾向にある。

4-2. 明津の空間分析



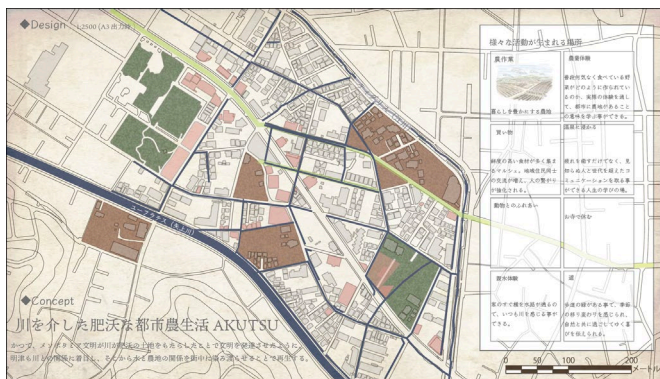
農地や川など、上図にみられるように明津は様々なポテンシャルをもつ都市であることに対し、要素が孤立し、それぞれが関係性を持っていないことが課題であると考察する。その結果、街全体のヒト、コト、モノの流れが停留し、空間が住宅街に飲み込まれているような状況のため、農地や川空間は肩身が狭く、中央を分断する尻手黒川道路はさらにその停留状況を推進させる。

5. 設計提案

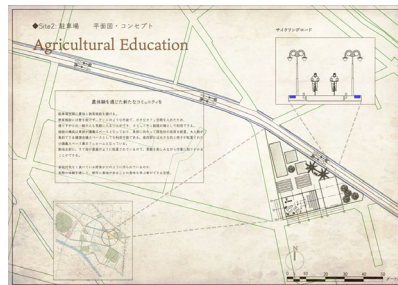
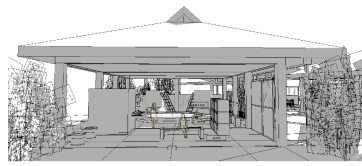
5-1. コンセプト

川を介した肥沃な都市農生活 AKUTSU

かつてメソポタミア文明が川が肥沃の土地をもたらしたことで文明を発達させたように、明津も川との関係に着目し、そこから水と農地の関係を街中に染み渡らせることで再生する。



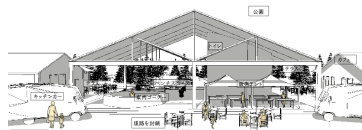
◆Site1: 明津支所
Bathhouse



◆Site2: 都農場
Agricultural Education



◆Site3: 旧商店街
Marche



参考文献

- ・川崎市ホームページ
- ・「川崎市史」(昭和43年12月発行)